

守り、そしてつなぐ――



# 天空の不夜城

8月2日、3日に開催される能代七夕「天空の不夜城」は、今年で10回目の運行を迎えます。今回の特集では、天空の不夜城運行の裏側と次世代へつなぐ活動をご紹介します。



## 一世紀の時を 超えて

能代の夏を盛り上げる祭りの一つである、能代七夕「天空の不夜城」は、平成25年に運行が始まりました。当時、能代の町を活気づけたい、にぎわいを取り戻したいといった思いから始まった祭りです。

天空の不夜城は明治時代に行われていた夏の七夕行事「能代七夕」を参考に作られました。当時、太鼓や笛のおはやし、田楽を頭に乗せた子どもたちと一緒に名古屋城を模した大きな城郭灯籠が町中を練り歩いたと言われています。戦後、電気の普及により電線が張り巡らされるようになると、高さが制限され、巨大な灯籠は運行できなくなりました。

かつて運行された巨大灯籠を復活させようという思いと、国道101号の電線地中化により天空の不夜城が始まりました。



かつて能代市で運行されていた巨大灯籠



日本一高い城郭灯籠として全国に名をはせた  
ちかすえ  
 愛季(右)。24・1メートルの高さを誇ります。  
かろく  
 嘉六(左)は、17・6メートルの高さで、明治時代の  
 能代七夕の写真をもとに作られました。

愛季、嘉六は運行しない間は解体されて保管され、補修作業が行われます。補修作業を行うのは小嶋将さんです。小嶋さんは愛季、嘉六を骨組みから設計・製作しました。

愛季、嘉六は、紙、針金、木でできています。組み立て時や、運行時で約1000カ所に破損部分が生じ、これを次の年の祭りまでに補修しなければなりません。紙が破れたところには新しく紙を張り、製作当時の図面を見ながら絵を描き直します。

「翌年の祭りに間に合わせるために1年かけて修理を行います。作業人数は2人。経年劣化もあつて年々補修箇所が増えているので、運行開始ギリギリまで作業しています」と小嶋さんは話します。

